

学校教員養成課程における教科連携による授業実践
のための題材研究：
大学生のトートバッグに関する実態調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 智子, 村上, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010167

学校教員養成課程における教科連携による授業実践のための題材研究

—大学生のトートバッグに関する実態調査—

高橋智子¹, 村上陽子²

Subject Research for Teaching of Coordinated School Subjects in a Teacher Training Program: Survey on Actual Situation about the Tote Bag among the University Students

Tomoko TAKAHASHI¹, Yoko MURAKAMI²

要旨

本研究は、2009年より取り組んでいる「学校教員養成課程における教科連携による授業実践に関する研究」の一部をなすものであり、学校教員養成課程における教科連携の資質・能力の向上を目的として、教科連携モデルの提案と実践を試みている。これまで、大学生の授業や教科連携に対する実態把握及び分析を行い、実践に取り組んできている。実践では、美術科と家庭科の学生が連携し、授業構想に取り組んできた（実践1）。この成果と課題を踏まえて、実践2に取り組んだ。実践2では、授業構想だけでなく、実際に学生が題材開発及び研究に取り組むこととした。本調査は、実践2に向けての予備調査である。本稿では、題材開発及び研究に関わるトートバッグの大学生への調査結果を報告することとする。

キーワード：教科連携，図画工作科，家庭科，トートバッグ，実態調査

1. はじめに

本研究は、2009年より取り組んでいる「学校教員養成課程における教科連携による授業実践に関する研究」の一部をなすものであり、学校教員養成課程における教科連携の資質・能力の向上を目的として、教科連携モデルの提案と実践を試みている。

これまで、大学生の授業や教科連携に対する実態把握及び分析を行い、実践に取り組んできている。実践では、美術科と家庭科の学生が連携し、授業構想に取り組んできた（実践1）。実践1では美術科または家庭科教員をめざす学生を対象とし、両教科に共通した題材（布）を設定した。実践1の成果は、学生が連携の意義を認識できるようになったこと、課題は学生間（教科間）で連携の捉え方や視点の広がりには相違が見られたことや他教科理解の意識が低かったこと等があげられた。さらに、実践1では授業構想（指導案づくり）のみに留まったため、連携の意義に対する理解を深めたり、手立てを考えたりすることが十分でなかったことがあげられる。

この成果と課題を踏まえて、実践（実践2）に取り組んだ。実践2では、授業構想だけでなく、学生が実際に題材開発及び研究に取り組むこととした。

題材開発及び研究にあたり、静岡大学教育学部附属特別支援学校高等部（以下、特別支援学校とする）と連携することとした。大学側の目的は、学生の教科連携の資質・能力の向上、特別支援学校の目的は、新製品の開発や生徒の作業能力の向上であった。対象授業は、作業学習（染色班）であり、題材はトートバッグ

製作である。本題材は、連携の実践以前より特別支援学校で取り組んでいた題材である（写真1）。大きさはA4を中心としており、柄は絞り染めに代表される染色方法によるものである。活動は、主に染色と縫製に分かれており、



写真1 附属特別支援学校の教員が開発したトートバッグ

前に、特別支援学校より、より良い製品づくり（生徒の製作技能の向上・コミュニケーション力の育成等）を行いたいとの要望があった。特に、現在は製品の購入者が保護者に限定されていることから、広く一般の人々に購入してもらえる製品づくりを目指したいという強い要望もあったため、それを念頭において題材開発及び研究に取り組むこととした。また、特別支援学校は本大学でも年に2回販売会を実施しており、そこでの販売促進を目指すことにより、生徒の製作意欲が向上し、より良い製品づくりが期待できると考えられる。

本調査は、実践2に向けての予備調査である。本稿では、題材開発及び研究に関わるトートバッグの大学生への調査結果を報告することとする。

2. 方法

調査時期は2014年9月20日～10月10日であり、調査対象は静岡大学教育学部1～4年生（男子142名、女子146名）である。調査方法は、質問紙調査（自記式、選択回答）で行った。回収率・有効回答率はともに100%であった。調査内容として、属性に関する項目、トートバッグに関する素材・形状・用途等に関する項目である。

3. 結果及び考察

(1) 欲しいと思うトートバッグの大きさ

全体でみると約7割がA3、次いでA4であると回答した。また、男女間で有意差はいられなかった(図1)。この結果より、特別支援学校が従来提案している大きさよりも、大きめのサイズを好んでいることが明らかになった。

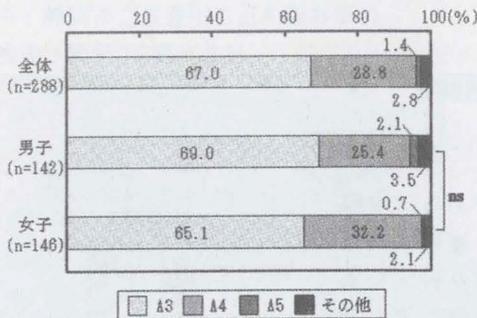


図1 欲しいと思うトートバッグの大きさ
有意差はコルモゴロフ・スミルノフ検定により求めた (* p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01)。

(2) トートバッグにいれたいもの

(1)の結果を受け、トートバッグに入れたいものを調査したところ、学生の生活スタイルに合わせて、ノートや教科書が8割を占めており(図2)、大学生生活で実用的に使用できるデザインを望んでいるといえる。図3では、使いたい場所を調査したが、全体の約8割が学校であると回答したことから、使用場面は学校生活が中心であるといえる。また、図4をみると、欲しい機能として、丈夫さが最も求められており、次いで収納の多さであった。従来のデザインは、収納力が低く、また小さな布を縫い合わせて制作しているため、丈夫さの観点から改善する余地があるといえる。

(3) 欲しいトートバッグの形状

全体では、たて長や横長の形状を好んでいることが明らかになった(図5)。男女とも同じ傾向が見られたが、男子は女子に比べてたて長を有意に好んでいた(p<0.1)。従来のデザインは、写真1のようにたて長のデザインになっているが、他にも正方形のタイプ

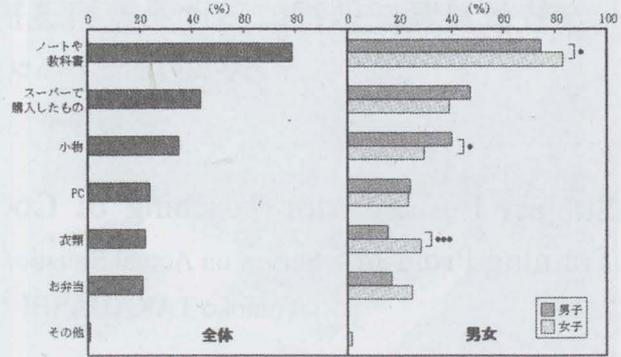


図2 トートバッグに入れたいもの (複数回答)
有意差は独立性の検定により求めた (* p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01)。

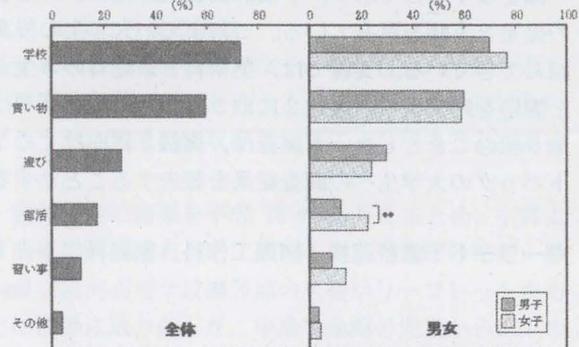


図3 トートバッグを使いたい場所 (複数回答)
有意差は独立性の検定により求めた (* p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01)。

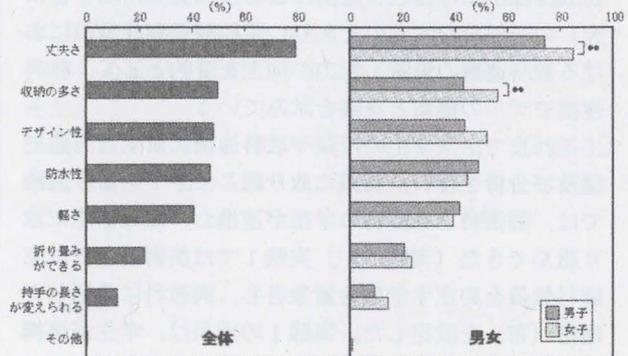


図4 トートバッグに欲しい機能 (複数回答)
有意差は独立性の検定により求めた (* p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01)。

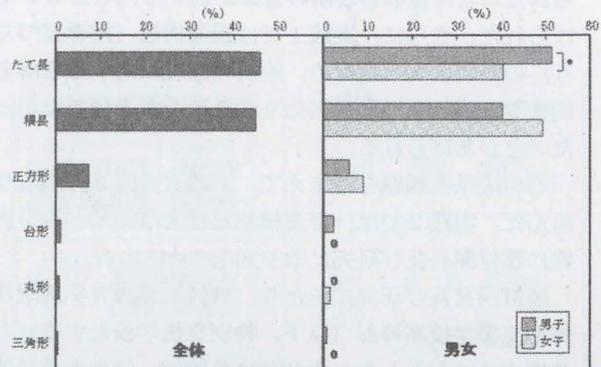


図5 欲しいトートバッグの形状 (複数回答)
有意差は独立性の検定により求めた (* p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01)。

があり、この結果からたて長や横長のタイプに改善する必要があるといえる。

また、底の形状については、全体では、底ありが底なしよりも有意に高かった ($p < 0.01$) (図6)。男女とも同様であったが、男子は約7割、女子は9割が底ありと回答しており、女子の方が有意に高かった ($p < 0.01$)。従来の特別支援学校のデザインは、底がないものとなっており、改善する必要があるといえる。

さらに、トートの持ち方については、全体では肩にかけるが8割と顕著に高かった(図7)。従来のデザインは、肩かけではなく手持ちのデザインになってお

り、学生のニーズに合っておらず、改善の余地があるといえる。その素材については、6割が軟らかい素材としており、肩にかけた時になじんで使いやすいものを求めているといえる(図8)。

(4) 欲しいと思うトートバッグの素材

表地は、全体では、綿が5割であった。綿は丈夫で手入れがしやすいという特徴を持つ。次いで、合皮が3割であった。これも丈夫さが特徴であるといえる。2割がナイロンを求めており、これは軽さや防水性を重視しているといえる(図9)。

裏地は、全体では、綿が5割、次いでナイロンが4

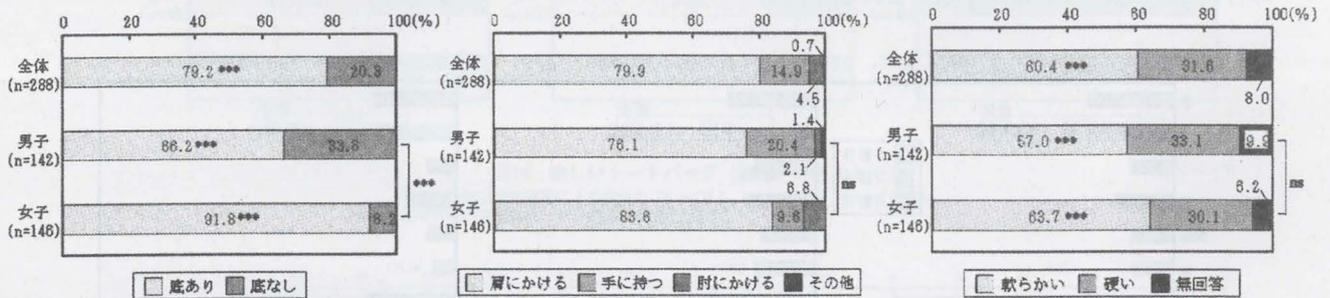


図6 欲しいトートバッグの底の形状
有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。項目間の有意差はバー内の数字横に記した。

図7 トートバッグの持ち方
有意差はコルモゴロフ・スミルノフ検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。

図8 トートバッグの持ち手の素材
有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。項目間の有意差はバー内の数字横に記した。

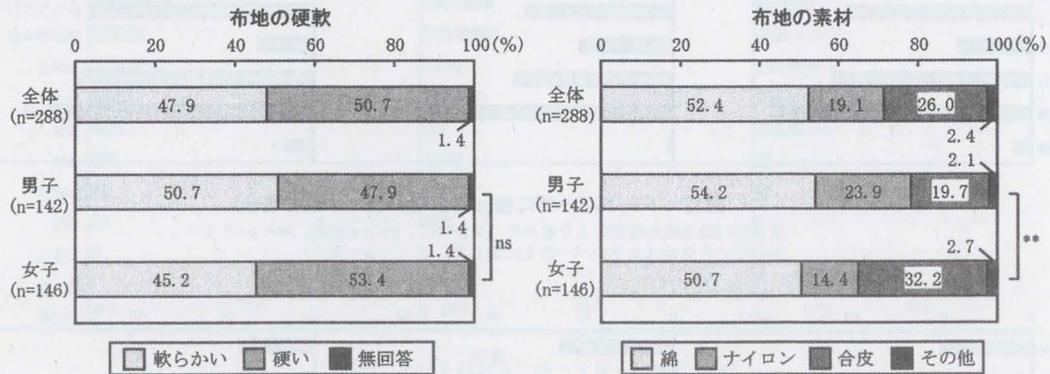


図9 欲しいと思うトートバッグの表地の素材
有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。

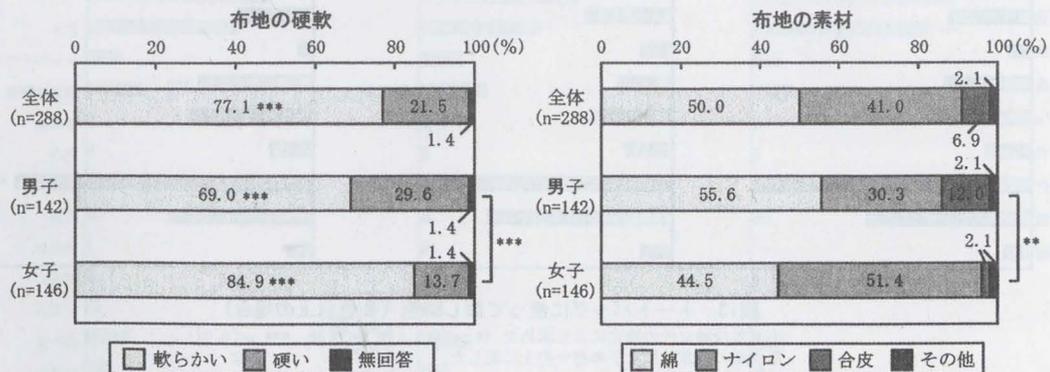


図10 欲しいと思うトートバッグの裏地の素材
有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。

割であった。ここでも、丈夫さと手入れのしやすさが求められていることがわかる(図10)。

従来のデザインは綿を用いており、本調査においても、同様の素材に対してニーズがあることから、引き続き、綿を使用する可能性を検討していく。

(5) 欲しいと思うトートバッグの色づかい

「無地の場合、色は何色使いが良いですか」という設問に対して、全体では、約6割が1色、4割が2色以上であり、前者が有意に高かった(図11)。従来のデザインは、多色使いが多く、若者のニーズを満たしていないといえる。その点に関して、色の使い方・組み合わせ方について、改善が求められる。

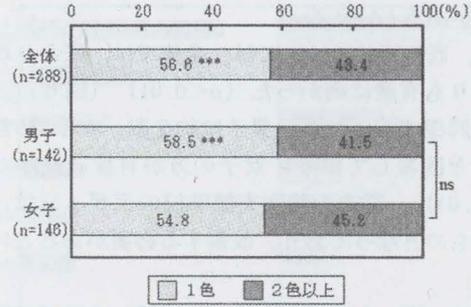


図11 生地の色づかい (無地の場合)

有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。項目間の有意差はバー内の数字横に記した。

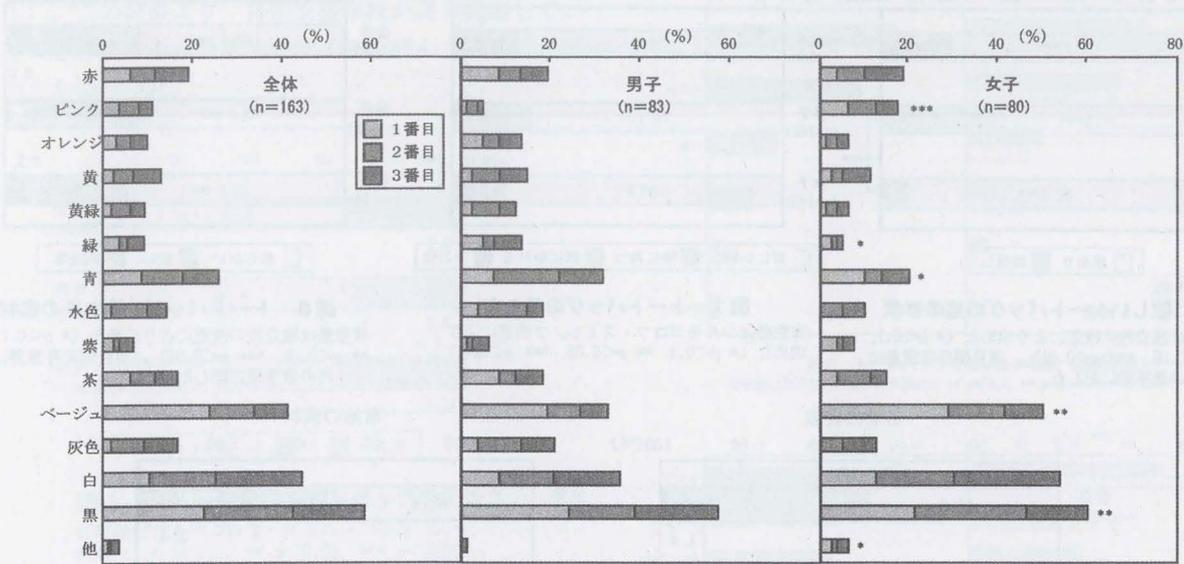


図12 トートバッグに使う欲しい色 (1色の場合)

有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。男女間の有意差は女子のバーの上に記した。

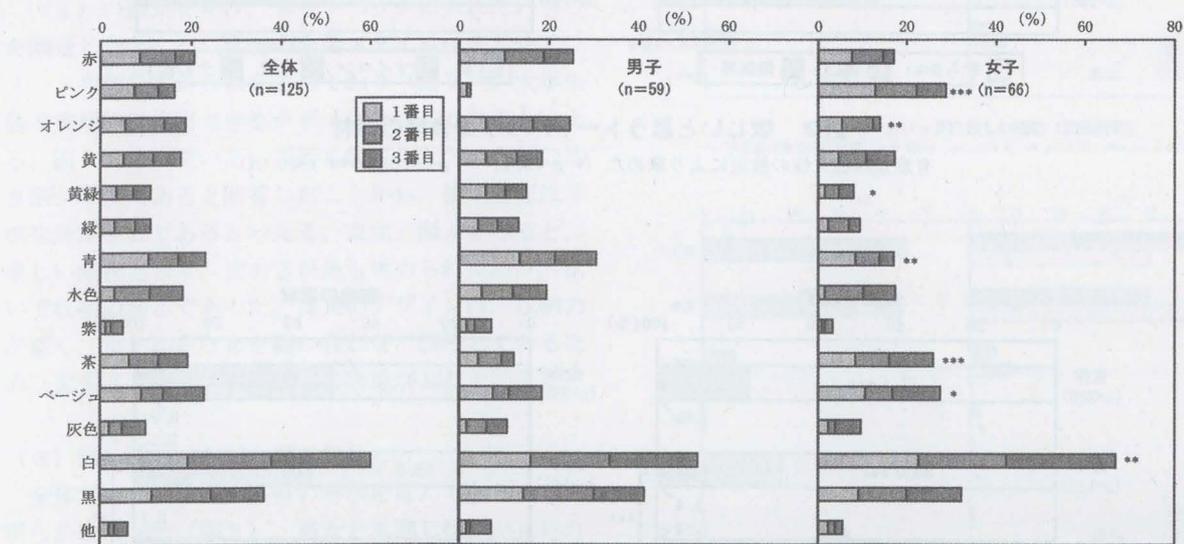


図13 トートバッグに使う欲しい色 (2色以上の場合)

有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。男女間の有意差は女子のバーの上に記した。

1色の場合、使用して欲しい色をみると、全体では黒、白、ベージュの順で多く、男女とも同様の傾向を示した。黒とベージュについては、女子の方が男子よりも有意に高かった ($p < 0.05$)。大学生は、落ち着いた色みを好むことが明らかになった (図12)。2色以上の場合、全体では白、黒が高く、男女とも同様の傾向を示した (図13)。全体的に1色でも2色でも色の好みに対する傾向は同じであった。しかし、1色の場合、

先に示した3色が他の色に比べて顕著に高かった。また、2色の場合は、白が顕著に高く、次いで男子は黒が高く、女子はピンクやベージュ、茶色等を好む傾向にあった。色の明度については、全体の7割が明るいものを好み、彩度については9割が落ち着いた色みを好むことが明らかになった (図14)。図12・13で分析したように、白・黒・ベージュといった色が好まれていたことから、従来のデザイン (色) では、モノトーン

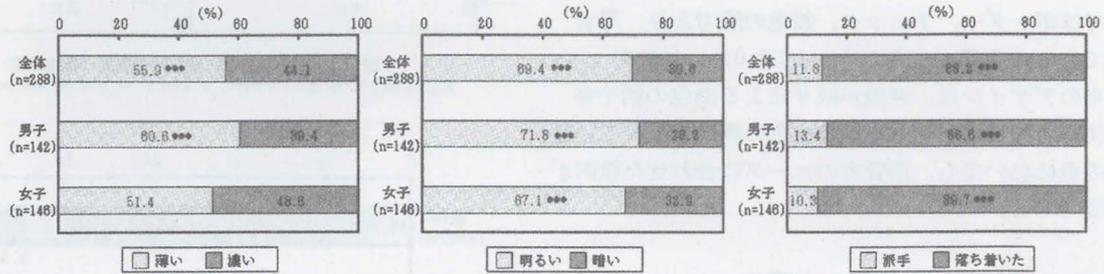


図14 欲しいトートバッグ (無地) の色のトーン
有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。各項目間の有意差は、バー内の数字横に記した。

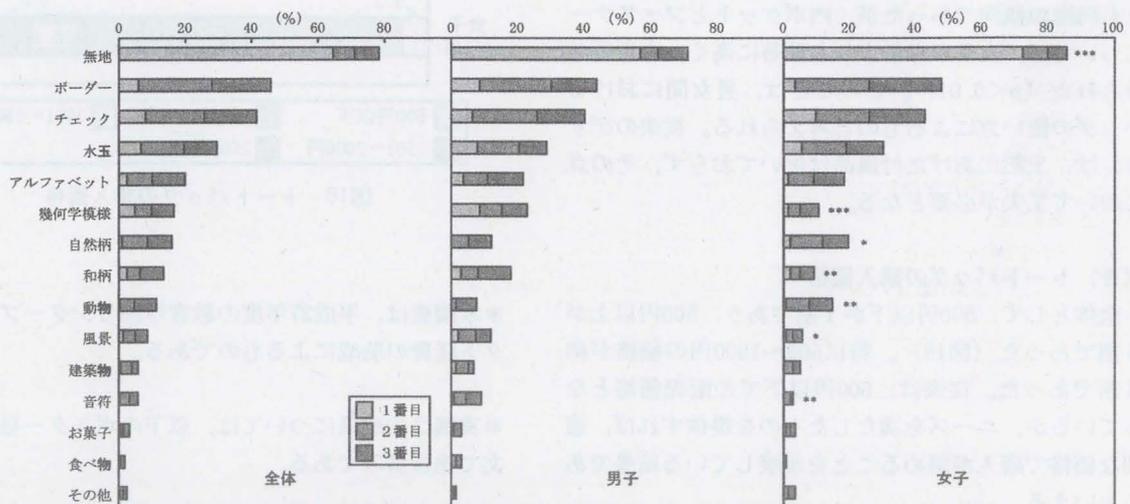


図15 トートバッグに使う欲しい柄 (表地)
有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。男女間の有意差は女子のバーの上に記した。

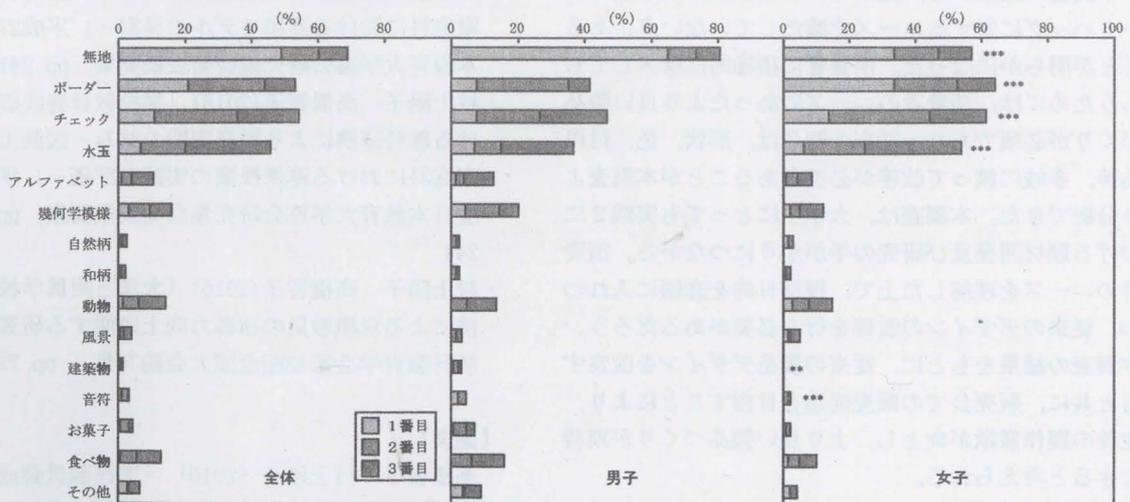


図16 トートバッグに使う欲しい柄 (裏地)
有意差は独立性の検定により求めた (* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。男女間の有意差は女子のバーの上に記した。

ンは用いられておらず、ピンクや黄色、青系のカラフルな色みの組み合わせが多かった。その点、改善が求められる。

(6) トートバッグに使ってほしい柄

全体として、表地は無地という回答が8割であり他に比べて、顕著に高かった(図15)。裏地についても、全体では無地が高かった。なお、裏地については、男子は無地が8割を占めていたのに対し、女子ではボーダー、チェック、無地の順であり、男女間で好みの相違が見られた($p < 0.01$) (図16)。従来のデザインは、表地が絞りによる染色の柄や多色使いとなっており、裏地は一色の無地となっている。この点においても、消費者のニーズに合わせた検討が必要である。

(7) トートバッグに欲しい付属品

全体としては、8割が内ポケットをあげており、次いでファスナー、外ポケットと続いた(図17)。男女とも同様の傾向であったが、内ポケットとファスナーについては、女子が男子よりも顕著に高く、有意差がみられた($p < 0.01$)。このことは、男女間におけるバッグの使い方によるものと考えられる。従来のデザインは、上記にあげた付属品は付いておらず、その点において工夫が必要となる。

(8) トートバッグの購入価格

全体として、500円以下が1割であり、500円以上が9割であった(図18)。特に500~1500円の価格が約6割であった。従来は、500円以下での販売価格となっているが、ニーズを満たしたものを提供すれば、適切な価格で購入が望めることを示唆している結果であるといえる。

4. まとめ

本調査の結果から、従来のデザインが、大学生のトートバッグに対するニーズを満たしていない点があることが明らかになった。消費者に積極的に購入してもらうためには、消費者のニーズにあったより良い製品づくりが必須であり、従来の製品は、形状、色、付属品等、多岐に渡って改善が必要であることが本調査より分析できた。本調査は、大学生にとっても実践2における題材開発及び研究の手がかりにつながる。消費者のニーズを理解した上で、授業目的を念頭に入れつつ、従来のデザインの改善を行う必要があるだろう。本調査の結果をもとに、従来の製品デザインを改良すると共に、販売会での販売促進を目指すことにより、生徒の製作意欲が向上し、より良い製品づくりが期待できると考えられる。

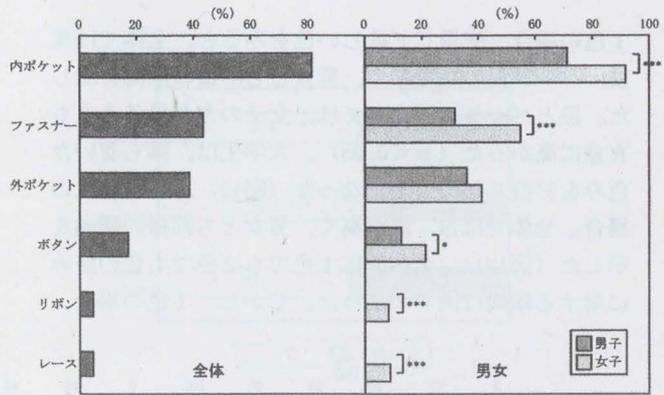


図17 トートバッグに欲しい付属品(複数回答)
有意差は独立性の検定により求めた(* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$)。

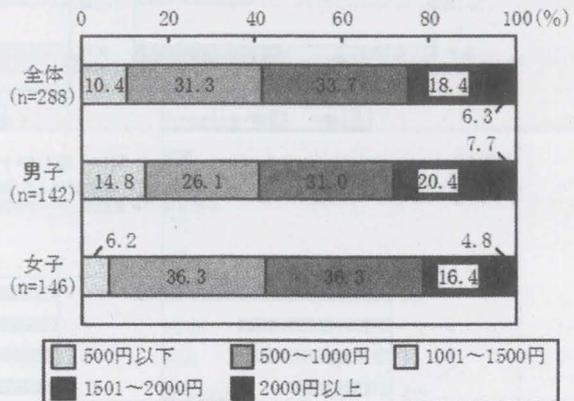


図18 トートバッグの購入価格

*本調査は、平成27年度の教育学部センタープロジェクト経費の助成によるものである。

*実践2の成果については、以下のポスター発表と論文で報告済みである。

【ポスター発表】

- ・高橋智子 村上陽子(2015)「学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試みー図画工作科・家庭科における連携モデルの提案ー」平成27年度日本教育大学協会研究集会発表概要集, pp. 241-242
- ・村上陽子 高橋智子(2015)「学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試みー図画工作科・家庭科における連携授業の実践と評価ー」平成27年度日本教育大学協会研究集会発表概要集, pp. 243-244
- ・村上陽子 高橋智子(2016)「大学と附属学校との連携による現職教員の指導力向上に関する研究」日本教科教育学会第42回全国大会論文集, pp. 796-197

【論文】

- ・高橋智子 村上陽子 (2016) 「学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み^{no.7}ー図画工作

- 科・家庭科における連携授業の実践と評価：授業づくりについて」教科開発学論集，第4号，pp.123-134
- ・村上陽子，高橋智子（2017）「学校教員養成課程における教科連携の資質・能力の育成－図画工作科・家庭科における連携授業の試み－」日本教育大学協会研究年報（第35集），印刷中